



残す

第2回

質を伝える



学生時代からそうだ

弓を引く時はいつもところが現れる  
気持ちと体のちぐはぐさに、つい苦笑してしまう  
当時顧問だった准教授の言葉

真に定まった矢はゆっくりと己が道に進む  
疾風の矢が留まったように映るという…

わたしにはまだ見えたことがない

そしてこの先もそれほどの境地にたどり着くとは思えない

あれから数年、わたしは社会の過酷な競争に息切れをして  
苦勞して入社した会社も続けられず

逃げるように今の工房に入った

たまの休みにこうして弓を引く以外は

ずっと手びねりに没頭している 地味だが心地はいい

効率ではなく質を優先する世界

わたしは足を踏みしめている実感が何よりうれしかった

気持ちと義務感が空回りしていた会社員時代

焦ってばかりで質をないがしろにしていた

だからいつも不安と罪悪感に押し潰されそうになって

後ろめたくおびえていたのかもしれない

技術士として野山を調査している彼とはその時からの縁だ

わたしとはまるで逆

逸る矢のような生き方

判断が遅れると行動はもっと遅れる、と

かつて決別してきた世界の住人だ

正直疲れるし、不安もないわけではない

仕事が充実していることはその表情からわかるし

彼の情熱とスピードが間違っていないことも理解できる

しかしわたしにはその生き方が速すぎて

彼の心の奥のやさしさを上手に汲み取ることができない

この未熟な矢の軌跡がそれを物語っている

今はお互いの将来の青写真の話はしていない

ところがともなっていないことをよくわかっているからだ

疾風の矢の軌跡がゆったりと弧を描き

的中する姿がわたしにも留まって見える日がくる

先生の言葉の通り 真に定まった心があれば

それまでは地に足をつけ

高い質を追い求めることにわたしのすべてを賭けよう

そしてお互いのところに厚みができたら

そのとき二人で未来を語ればいい

溶け出したやわらかな想いたちは

ゆっくりと己が道に進むはずだから

質と想いを追い求める印刷



株式会社 大 應

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-7-5

Tel. 03(3292)1488

<http://www.dai-oh.co.jp>